

海ごみ調査・清掃活動レポート

海ごみ調査・清掃活動レポート

1日目

船に乗り込み出発したものの、揺れが激しく最初の30分ほどは体調不良に悩まされ、活動の厳しさを実感しました。酔い止めを服用して回復した後は、講義と海ごみ視察に参加しました。講義では他の島での調査結果や船の設備について説明を受け、続いて班ごとに海ごみを探しました。

当初は光の反射や波の影響で見つけられませんでしたが、時間が経つにつれ目が慣れ、ペットボトルや漁具、発泡スチロールなどが確認できました。想像以上の量に大きな驚きを覚え、さらに「このごみはどこから来たのか」と考えたとき、もし誰かの不注意なポイ捨てによるものだとしたら、とても悲しいことだと感じました。



2日目

二日目は目的地の対馬に到着しました。上陸後、椎根海岸を訪れると、遠目からでも分かるほど大量の海ごみが広がり、深刻さを実感しました。足の踏み場がほとんどないほどで、外国語表記のごみも多く、日本だけの問題ではないと強く感じました。

区域ごとに分かれて清掃を行いましたが、表面の大きなごみより地中に埋もれた小さなごみの多さに驚きました。ごみの層が形成されているようで、環境問題の深刻さを再認識しました。



大量のごみを回収しても周囲の景色が大きく変わらず、虚しさを覚えた一方で、問題解決には長期的な取り組みが不可欠であると理解しました。

午後は小茂田海水浴場を訪れ、きれいに見える海岸の裏にある清掃の努力を知りました。

ポイ捨ての根絶は個人の意識改革から始まり、世界的な課題として解決に取り組む必要があると感じました。

3日目

最終日は全体の振り返りを行いました。他の参加者の感想を聞き、自分の言語化の力や発信力の不足を痛感しました。今後は積極的に意見を発信できるよう努力したいと考えています。

今回の活動で最も大きかった学びは、海ごみの問題を「自分事」として捉えられたことです。現場を目の当たりにしたこと、必ず何らかのアクションを起こしたいという思いが芽生えました。

また、活動を通じて「見えないところで支える人の存在」に気づきました。船での移動や活動を可能してくれた船員やスタッフ、清掃で海岸を守ってくれている人々など、多くの人々の努力が背景にありました。今後はその存在に感謝し、支えを意識できる人間でありたいと強く思いました。

まとめ

3日間の活動は、海ごみ問題の深刻さを直接体験できる貴重な機会となりました。同時に、環境問題は一人一人の意識と行動の積み重ねでしか解決できないことを実感しました。今後は得られた学びを発信し、社会全体に広げていくことを目標にしたいと思います。